

勝林寺々報

ということです。要するに「有るじや無いじや」とか「死んでも魂は続くんだ。いや死んだらそれでおしまいた」など、かたよつた、依怙地ななわばかりのなかの生きかたを指しているのです。

しかし考えてみますとそれは人ごとではありません。自分の小さななわぱり、勝手に引いたわくぐみのなかでしかくらしていないのは、ほかならぬ私ではないのでしょうか。

そんな私のくらしをお駆迦は「微塵世界の衆生」平等覚に帰命せよ。

阿弥陀如来さまをお駆迦さまは「ひかりのほとけさま」とあおぎ、その「ひかり」のはたらきやお徳を『大無量寿經』では十一のよびかたでたたえておられます。

出石組仏婦連盟総会

例年通り仏婦連盟総会が次の日程により開催されます。

ご本山伝道院の部長先生の講話です。勝林寺門徒の物故者は次

さそいあつてお参りください。追悼会がつとめられます。

大無邊ひろびろとしているのちに生れかわらせよう

とはだらいてくださる光が無辺光仏とおよびする

阿弥陀如来さまなのだよと、このご和讃はおしき

てくださつているのです。

阿弥陀如来さまのぶ様

清水久子様

六月二十三日(日)

前九時半より

兵庫教区企画推進室会議

基幹運動本部専門部会(本山)

テレホン法話研究会(本山)

島根瑞泉寺永代経法話

西宗寺前坊守様七回忌法要

九日

谷垣なつ子氏宅百ヶ日

十日

守会

八日

京都教区連研修会講師・出石組坊

十一日

西宗寺前坊守様七回忌法要

五月	六月	六月のこよみ
三十一日	六月二十三日(日)	本山阿弥陀堂昭和修復完成記念法要
三十二日	六月二十四日	例年通り仏婦連盟総会
三十三日	六月二十五日	ご本山伝道院の部長先生の講話
三十四日	六月二十六日	勝林寺門徒の物故者は次
三十五日	六月二十七日	さそいあつてお参りください。追悼会がつとめられます。
三十六日	六月二十八日	大無邊ひろびろとしているのちに生れかわらせよう
三十七日	六月二十九日	とはだらいてくださる光が無辺光仏とおよびする
三十八日	六月三十日	阿弥陀如来さまなのだよと、このご和讃はおしき
三十九日	六月一日	てくださつているのです。
四十日	六月二日	阿弥陀如来さまのぶ様
四十一日	六月三日	清水久子様
四十二日	六月四日	六月二十三日(日)
四十三日	六月五日	前九時半より
四十四日	六月六日	兵庫教区企画推進室会議
四十五日	六月七日	基幹運動本部専門部会(本山)
四十六日	六月八日	テレホン法話研究会(本山)
四十七日	六月九日	島根瑞泉寺永代経法話
四十八日	六月十日	西宗寺前坊守様七回忌法要
四十九日	六月十一日	京都教区連研修会講師・出石組坊
五十日	六月十二日	十一日
五十一日	六月十三日	十二日
五十二日	六月十四日	十三日
五十三日	六月十五日	十四日
五十四日	六月十六日	十五日
五十五日	六月十七日	十六日
五十六日	六月十八日	十七日
五十七日	六月十九日	十八日
五十八日	六月二十日	十九日
五十九日	六月廿一日	二十日
六十日	六月廿二日	廿一日
六十日	六月廿三日	廿二日
六十日	六月廿四日	廿三日
六十日	六月廿五日	廿四日
六十日	六月廿六日	廿五日
六十日	六月廿七日	廿六日
六十日	六月廿八日	廿七日
六十日	六月廿九日	廿八日
六十日	六月三十日	廿九日
六十日	六月一日	三十日
六十日	六月二日	三十日
六十日	六月三日	三十日
六十日	六月四日	三十日
六十日	六月五日	三十日
六十日	六月六日	三十日
六十日	六月七日	三十日
六十日	六月八日	三十日
六十日	六月九日	三十日
六十日	六月十日	三十日
六十日	六月十一日	三十日
六十日	六月十二日	三十日
六十日	六月十三日	三十日
六十日	六月十四日	三十日
六十日	六月十五日	三十日
六十日	六月十六日	三十日
六十日	六月十七日	三十日
六十日	六月十八日	三十日
六十日	六月十九日	三十日
六十日	六月二十日	三十日
六十日	六月廿一日	三十日
六十日	六月廿二日	三十日
六十日	六月廿三日	三十日
六十日	六月廿四日	三十日
六十日	六月廿五日	三十日
六十日	六月廿六日	三十日
六十日	六月廿七日	三十日
六十日	六月廿八日	三十日
六十日	六月廿九日	三十日
六十日	六月三十日	三十日
六十日	六月一日	三十日
六十日	六月二日	三十日
六十日	六月三日	三十日
六十日	六月四日	三十日
六十日	六月五日	三十日
六十日	六月六日	三十日
六十日	六月七日	三十日
六十日	六月八日	三十日
六十日	六月九日	三十日
六十日	六月十日	三十日
六十日	六月十一日	三十日
六十日	六月十二日	三十日
六十日	六月十三日	三十日
六十日	六月十四日	三十日
六十日	六月十五日	三十日
六十日	六月十六日	三十日
六十日	六月十七日	三十日
六十日	六月十八日	三十日
六十日	六月十九日	三十日
六十日	六月二十日	三十日
六十日	六月廿一日	三十日
六十日	六月廿二日	三十日
六十日	六月廿三日	三十日
六十日	六月廿四日	三十日
六十日	六月廿五日	三十日
六十日	六月廿六日	三十日
六十日	六月廿七日	三十日
六十日	六月廿八日	三十日
六十日	六月廿九日	三十日
六十日	六月三十日	三十日
六十日	六月一日	三十日
六十日	六月二日	三十日
六十日	六月三日	三十日
六十日	六月四日	三十日
六十日	六月五日	三十日
六十日	六月六日	三十日
六十日	六月七日	三十日
六十日	六月八日	三十日
六十日	六月九日	三十日
六十日	六月十日	三十日
六十日	六月十一日	三十日
六十日	六月十二日	三十日
六十日	六月十三日	三十日
六十日	六月十四日	三十日
六十日	六月十五日	三十日
六十日	六月十六日	三十日
六十日	六月十七日	三十日
六十日	六月十八日	三十日
六十日	六月十九日	三十日
六十日	六月二十日	三十日
六十日	六月廿一日	三十日
六十日	六月廿二日	三十日
六十日	六月廿三日	三十日
六十日	六月廿四日	三十日
六十日	六月廿五日	三十日
六十日	六月廿六日	三十日
六十日	六月廿七日	三十日
六十日	六月廿八日	三十日
六十日	六月廿九日	三十日
六十日	六月三十日	三十日
六十日	六月一日	三十日
六十日	六月二日	三十日
六十日	六月三日	三十日
六十日	六月四日	三十日
六十日	六月五日	三十日
六十日	六月六日	三十日
六十日	六月七日	三十日
六十日	六月八日	三十日
六十日	六月九日	三十日
六十日	六月十日	三十日
六十日	六月十一日	三十日
六十日	六月十二日	三十日
六十日	六月十三日	三十日
六十日	六月十四日	三十日
六十日	六月十五日	三十日
六十日	六月十六日	三十日
六十日	六月十七日	三十日
六十日	六月十八日	三十日
六十日	六月十九日	三十日
六十日	六月二十日	三十日
六十日	六月廿一日	三十日
六十日	六月廿二日	三十日
六十日	六月廿三日	三十日
六十日	六月廿四日	三十日
六十日	六月廿五日	三十日
六十日	六月廿六日	三十日
六十日	六月廿七日	三十日
六十日	六月廿八日	三十日
六十日	六月廿九日	三十日
六十日	六月三十日	三十日
六十日	六月一日	三十日
六十日	六月二日	三十日
六十日	六月三日	三十日
六十日	六月四日	三十日
六十日	六月五日	三十日
六十日	六月六日	三十日
六十日	六月七日	三十日
六十日	六月八日	三十日
六十日	六月九日	三十日
六十日	六月十日	三十日
六十日	六月十一日	三十日
六十日	六月十二日	三十日
六十日	六月十三日	三十日
六十日	六月十四日	三十日
六十日	六月十五日	三十日
六十日	六月十六日	三十日
六十日	六月十七日	三十日
六十日	六月十八日	三十日
六十日	六月十九日	三十日
六十日	六月二十日	三十日
六十日	六月廿一日	三十日
六十日	六月廿二日	三十日
六十日	六月廿三日	三十日
六十日	六月廿四日	三十日
六十日	六月廿五日	三十日
六十日	六月廿六日	三十日
六十日	六月廿七日	三十日
六十日	六月廿八日	三十日
六十日	六月廿九日	三十日
六十日	六月三十日	三十日
六十日	六月一日	三十日
六十日	六月二日	三十日
六十日	六月三日	三十日
六十日	六月四日	三十日
六十日	六月五日	三十日
六十日	六月六日	三十日
六十日	六月七日	三十日
六十日	六月八日	三十日
六十日	六月九日	三十日
六十日	六月十日	三十日
六十日	六月十一日	三十日
六十日	六月十二日	三十日
六十日	六月十三日	三十日
六十日	六月十四日	三十日
六十日	六月十五日	三十日
六十日	六月十六日	三十日
六十日	六月十七日	三十日
六十日	六月十八日	三十日
六十日	六月十九日	三十日
六十日		

私のお念仏

宮嶋千秋

六月に入りますと田植えもほとんどおわります。

昔とは随分はやくなつたものです。そしてまた昔は学校でも農繁期になりますとお父さんお母さんのお手伝いをしなさいといつて休みがありました。忙しい仕事を親子ともどもするなかで、子どもと両親との強いきずなも結ばれていたように思われます。現在ではひろく機械化もすみ子どもの手伝うことも少し、親子そろつて忙しさをあじわうことはほとんどないよう思います。

稻は日本では「みずほのくに」といわれたぐらいたから、もう国のできるところから作られたのではないかと想像いたします。とにかく日本の農産物ではないかと思われます。力を左右するとまでいわれてきたように思います。そういうことで農家のかたがたが稻を作ると育てるとき、体だけではなく心をほんとうにうち込んでおられるように思います。

すべてのものをつくるときのすぐれた創作者、耕作者のかたがたの心がまえをよく耳にし感動させられることができます。ちょうど母親が子どもを育てるときと同じように、まったく損得をはなれて、子を育てることをみずからいのちとして育てよおられるよう思います。

あれもしてやりたいこれもしてやりたいと、子どものことで終日氣をもんで、それで親となつてくださるのです。まさに阿弥陀さまのおはらきが人の親のところのなかにも入つておられるのだと思います。

たまに見ていくらいなことばでお手上手をいつても、そんなことは稻も育ちません子もそだちません。生れ出る前から死ぬる先まで毎日毎日目をかけ願をかけいのちをかけなければものは育ちません。阿弥陀さまも十切とい

速い昔から今まで毎日毎日私に頼いをかけてくださいているのです。

毎日このように愚痴のくらしをしている私を、だからそのままとよんでくださる親のいてくださいるほど有難いことは他にはないよう思います。

「みのりを開く会」での御院家様のお説教のな

かに、人間の苦惱のなかでいちばん基本的なものが「生・老・病・死」の四苦。その他に四つの苦

しみを加えて八苦だとおつしやいました。そして人間は生れたときから苦惱を背負つてゐるのだと

いわれておりました。そしてその苦惱を縁として人と生れた喜びに会おせていたとけるのは何とし

ても入間に生れたもつたいたなさだと聞かせていました。畜生であつたらあじわうことはでき

だきました。畜生であつたらあじわうことはできません。どんなにあさましく苦しく暮らしであつても、阿弥陀さまのおはらきによつて、ちゃんと教わっているように思います。

なにも喜ぶようなことがないということは、何

も苦労がないということだと思います。

人間なにかことを起せば苦労がついてきます。

そのなかでやりとげようという意欲もわいてきます。

その苦労をこ縁にして真の人生の歓びにあうこ

とができるのだと思います。それが人間のねうち

ではないでしょうか。

世間には、苦しみばかりで歓びのない人も多くおられます。働けない人、体の不自由な人もたくさんいらっしゃるなかに住わせていただきながら

せいたくな愚痴の日々暮らしの私です。しかしそのなかにもつたないお念仏の声を耳にさせていただきます。

南無阿弥陀仏

苦のなかに 不思議にこころ めばえたり
歎ぶこころ 念仏のこえ

「連研」へ七名

今年度から始まつた出石組第五期「連研」はその第一回研修会を五月十二日(日)、出石福成寺を会場にしてひらかれました。

六月二十九日・三十日

吉岡温泉での順光寺仏社との大交歓会はいかがなりますやら。

翌朝「願正寺」へ・源左さんのことは前月寺報で紹介してある。

大山高原・日よりがよければばらしい旅になる。

仏社仏婦役員を通じ至急申し込みを

今回からはことに日高地区五ヶ寺の方々も加わつた「新出石組」としての最初の研修会であつただけに朝八時半から午後四時までびつしりの日程でした。なにやら新鮮な熱気の感ぜられた研修でした。組内十九ヶ寺からの参加研修員七十名のうち勝林寺からは次

六人が今期の研修員です。今年と明年二年間

六日十二回の厳しい研修をみごと修了されま

すよう門徒全体で応援したいものです。

生田善七様 沢田寿造様 宮嶋裕之様 坂本昭子様 坂本さわ子様 宮嶋幸子様

本堂格天井工事をすすむ

本堂格天井のことについては先月号寺報の通り兵門仙閣堂による施工と決まりました。

格天井のわく組み工事が終り二十九日からはウルシ塗り仕上作業に入る。六月二十日を目途に急ピッチで工事は進められています。

源左同行の寺「願正寺」の旅行参 加 し ゆ う 研 修 旅 行

出石町川原 龍井 幸男氏(勝林寺門徒総代)

代が、このほど行なわれた春の叙勲にて第六等瑞宝章を贈られました。氏が地域消防活動に永年挺身されたその誠意と労苦に対する表

彰として贈られたものでした。五月二十一日皇居における天皇からの授与式にはご夫婦そろつて参加されました。

龜井さんの叙勲は私たち同じご門徒としても大きなほこりであり榮誉です。

ここからお祝いいたします。

龜井さんの叙勲は私たち同じご門徒としても大きなほこりであり榮誉です。

龜井さんの叙勲は私たち同じご門徒としても大きなほこりであり榮誉です。